

# 特別講演Ⅱ

座長：井手 久満（順天堂大学）

## ユニットで漢方処方を理解する ～泌尿器科篇～

あきば伝統医学クリニック、日本東洋医学会名誉会員  
秋葉 哲生

〈はじめに〉

それぞれの漢方処方には固有の効能がある。その胆(キモ)となる生薬(キグスリ)の組み合わせを演者はユニットと呼んでいる。

ユニットで処方の性格を把握すると、当該方剤の個性を把握しやすくなり、よりの確な運用が可能になる。泌尿器科四処方について解説を試みる。

〈猪苓湯〉

泌尿器科関連の漢方でもっとも適応症が広い。薬能の中心は、沢瀉、猪苓、茯苓の利尿ユニットで、五苓散と共通する。尿路感染症が主だが、適応は腎臓炎、結石症、血尿、浮腫、下痢と広範である。

副作用も少なく、処方しやすい印象がある。

〈猪苓湯合四物湯〉

猪苓湯に、当帰・川芎・芍薬・地黄の四物湯を合わせて、効果増強を期した処方である。四物湯は補血のユニットで、貧血や出血がある場合に適用される。

ただし、胃腸虚弱者には不適當な場合がある。

〈清心蓮子飲〉

本方の効能の中心は、麦門冬・人參・地骨皮の生津作用(広義の滋潤)であろう。補陰して虚熱を冷まし、人參・黄耆で補気する。日頃から広義の乾燥傾向(津虚または陰虚)がある虚弱な人に、泌尿器科疾患が起った際の処方と考える。

黄芩が配されているので副反応に留意したい。

〈竜胆瀉肝湯〉

下焦の湿熱、すなわち下半身の湿(水毒)のめぐりが滞り、排尿痛や残尿感を呈した場合の薬方の一つである。地黄・当帰で補血、黄芩・山梔子で清熱消炎、木通・車前子・沢瀉で利水をはかる。御婦人の「こしけ」(帯下、おりもの)も適応症なので、婦人科領域にも応用される。

こちらも黄芩が配されているので副反応に留意したい。

※四方処方構成

猪苓湯＝猪苓3、茯苓3、滑石3、沢瀉3、阿膠3g

猪苓湯合四物湯＝猪苓湯に地黄3、芍薬3、川芎3、当帰3g

清心蓮子飲＝麦門冬4、茯苓4、黄芩3、車前子3、人參3、黄耆2、甘草1.5、蓮肉4、地骨皮2g

竜胆瀉肝湯＝地黄5、当帰5、木通5、黄芩3、車前子3、沢瀉3、甘草1、山梔子1、竜胆1g